

第3章 調査回答者の基本的属性

本章では、調査回答者の基本的属性を中心にみていく。具体的には、性別、年齢、学歴、以前の職業（最長職）、受講のさいの所要時間、家族構成、健康状態などである。

第1節 調査回答者の基本的属性：性別・年齢・学歴・職業

図表3-1は、調査回答者の性別、年齢、(最終)学歴を示したものである。これによると、性別では男性49%、女性51%と、やや女性が多いものの、男女ともほぼ半々の比率であった(以下、文中では原則として小数点以下を四捨五入して記載する)。

年齢は平均が69.5歳で、これは2013年調査時点での平均67.4歳と比べて2歳以上高くなっている。つまりここ3年半の間に受講者の平均年齢は2歳以上上がったということであり、まもなく平均年齢が70歳をこえるものと予想される。男性の平均年齢はすでに70歳をこえている。年齢をよりくわしくみると、最も多い層が60代後半の45%であった。次いで70代前半が28%で、65歳から74歳までの間に全体の73%が収まっていることになる。2013年調査では60代後半が37%、70代前半が20%、合計57%であったことを考えると、この層がこの3年ほどで急激に増えたことがわかる。逆に64歳

図表3-1 調査回答者の基本的属性

	全体	男性	女性	2013年調査 比率
	比率(回答数)	比率	比率	
性別				
男性	49.4(397)			46.4
女性	50.6(406)			53.6
全体	803			1346
年齢			**	
59歳以下	0.6(5)	0.3	1.0	3.0
60～64歳	11.9(94)	4.6	19.5	28.2
65～69歳	44.7(352)	46.4	42.8	37.3
70～74歳	27.8(219)	32.0	23.8	20.9
75～79歳	11.6(91)	13.1	10.0	8.1
80歳以上	3.3(26)	3.6	2.8	2.5
全体	787	388	390	1282
平均年齢：69.49歳(男性70.35歳、女性68.59歳)、年齢の範囲：57～93歳				平均年齢 67.42歳
(最終)学歴			**	
小・中学校	1.1(9)	1.3	1.1	2.2
高等学校	36.0(282)	25.4	46.6	43.8
短大・高専	14.9(117)	5.6	24.5	16.3
大学・大学院	48.0(376)	67.7	27.9	37.7
全体	784	390	380	1439

** $p < .01$

以下の層は13%で、2013年の31%にくらべて半数以下に減っている。60代前半ではまだフルタイムで働いている者が多いものと考えられる。

年齢を男女別にみると、平均年齢では男性が70.4歳、女性が68.6歳でどちらもほぼ70歳前後の平均年齢である。男女とも60代後半の層が最も多いものの、男性は70代以上が49%とほぼ半数が70代以上であるのに対し、女性の場合は70代以上が37%と3分の1強である。逆に60代前半以下では、男性5%、女性21%と女性のほうがかなりの高率であった。2013年調査では70代以上の者は、男性38%、女性26%と、男女ともそれほど多くはなかった。つまりここ数年で男女とも70代以上の者が増えたということである。

(最終) 学歴に関しては、大学卒業者(大学院を含む)が48%と、受講者のほぼ2人に1人が大学卒であった。短大卒を合わせるとじつに63%が大学卒業者であった。2013年調査では、高等学校卒業者が44%と最も多く、大学(院)卒業者は38%(短大以上卒54%)で、高等学校卒業者のほうが高率であった。2013年調査が6月に受講者全員を対象に行われたのに対し、今回の調査が1月にサンプル化された受講者に対して調査が行われたこともその遠因かもしれない。なお1998年に大阪府老人大学で行われた調査では、大学卒18%、短大卒以上41%であり、ここ20年の間に高齢者大学校受講者の学歴が飛躍的に上昇している。

学歴もまた男女差が大きい。大学卒の者の比率は、男性68%、女性28%と非常に差が大きい。しかし短大・高専卒を含めると、男性73%、女性52%となりやはり男性のほうが高学歴であるものの差は縮まっている。なお小中学校卒の者は男女とも1%でいどであった。年齢別では有意差はうかがえないものの、年齢の若い層がやや高学歴であった(巻末資料参照)。

図表3-2は、「以前の職業(最も長くかかっていたもの)」をみたものである。「以前の職業」では、管理職(25%)と事務職(21%)の比率がとくに高い。無職(含主婦)12%と教育・研究職11%も一定の比率を示していた。自営業・専門職・技能職などはそれぞれ7~8%であった。

以前の職業を男女別にみると、管理職で男女差ははっきりとうかがわれた(男性46%、女性4%)。女性の管理職登用の問題が議論される根拠もこのあたりと関連するだろう。技能職も男性が高率で

図表3-2 以前の職業(最長職)

以前の職業(最長職)	全体	男性	女性
	比率(回答数)	比率	比率
無職(主婦を含む)	12.0(97)	2.8	20.8
自営業・農業など	7.7(62)	5.8	9.4
専門職(医師、技師など)	7.0(57)	7.8	6.5
管理職(官公庁・民間)	24.8(201)	46.0	4.0
事務職(官公庁・民間)	20.6(167)	11.9	29.5
教育・研究職	10.9(88)	6.3	15.4
技能職	6.9(56)	10.6	3.2
販売・サービス職	4.7(38)	6.6	3.0
パート、アルバイトなど	2.8(23)	1.0	4.5
その他	2.5(20)	1.3	3.7
全体	809	396	403

あった（男性11%、女性3%）。逆に事務職（男性12%、女性30%）と無職（含主婦）（男性3%、女性21%）、教育・研究職（男性6%、女性15%）あたりでは、女性の比率が高かった。職業における性差は顕著であり、職業面での性別役割分業の残滓は存在するといえるだろう。

第2節 所要時間・家族構成・健康状態など

図表3-3は高齢者大学までの所要時間をみたものである。所要時間が30分から1時間の者が全体の58%におよんでいた。1時間半以上かけて通学する者も4%強存在する。今回の調査では居住地はたずねていないが、2013年調査では大阪市内在住者が34%でほぼ3人に1人が大阪市内在住者であった。巻末資料によると、所要時間は男性のほうにやや時間をかけて通学している者が多く、年齢による差はあまりうかがわれなかった。

図表3-3 高齢者大学までの所要時間

所要時間（平均して）	比率（回答数）
30分未満	11.0(89)
1時間まで	58.2(472)
1時間30分まで	26.5(215)
2時間まで	3.6(29)
2時間をこえる	0.7(6)
全体	811

図表3-4は現在の家族構成をみたものである。これによると配偶者との2人暮らしの者が最も多く、ほぼ58%（2013年調査では49%）の者がこの区分に収まった。ひとり暮らしは17%であった。三世同居者は3%でいどと、かなり低率であった。

図表3-4 現在の家族構成

家族構成	全体	男性	女性
	比率(回答数)	比率	比率
ひとり住まい	17.3(138)	5.8	29.3
妻または夫との2人暮らし	57.7(460)	72.1	43.2
子ども（夫婦）との二世帯暮らし	12.9(103)	12.4	13.9
子ども、孫などとの三世帯暮らし	2.8(22)	1.8	3.3
その他	9.3(74)	7.9	10.3
全体	797	394	389

家族構成では顕著な男女差がうかがわれた。すなわち夫婦2人暮らしの者は、男性72%、女性43%で、逆にひとり暮らしの者は、男性6%、女性29%であった。この傾向は2013年調査とほぼ同様であった。ひとり暮らしは女性に多く、夫婦暮らしが男性に多いということは、平均結婚年齢が男性のほうに高く、平均寿命が女性のほうが長いことと関連があるのかもしれない。なお予想されたことではあるが、ひとり暮らしの者は60代15%、70代前半19%、70代後半以上22%と、年齢が上がるにつれて高くなっていった。また「その他」が9%以上ある点も見逃せない。巻末資料から女性

と60代にこの比率が高いことから推測して、(介護問題を含めた) 親との同居やきょうだいとの同居の者が一定数いる点には留意があるものと考えられる。

表3-5 健康状態と介護認定

	比率 (回答数)
健康状態	
非常に健康	19.8 (158)
どちらかといえば健康	67.9 (543)
どちらかといえば健康ではない	8.8 (70)
あまり健康ではない	3.6 (29)
全体	800
介護認定	
受けたことがない	97.6 (780)
受けたが「非該当:健康」であった	0.1 (1)
要支援 1	1.1 (9)
要支援 2	0.5 (4)
要介護 1	0.1 (1)
要介護 2	0.4 (3)
要介護 3以上	0.1 (1)
全体	799

図表3-5は、健康状態関連の表である。この上段によると、「健康」だと答えた者(「非常に健康」+「どちらかといえば健康」)は88%と、ほぼ9割近くの者が「健康」だということであった。居住地域の福祉施設というよりはむしろ、通学する学習施設であるということを見ると、「健康」な者が多いという点は首肯できよう。同様に下段の「介護認定」に関しても、「受けたことがない」者あるいは「受けたが健康であった」者が合計で98%と、上記の結果を裏づける数値が示された。健康状態は男女別にみて有意な差がうかがわれた。すなわち「健康である」者は、男性85%、女性91%と、女性のほうに健康感が高かった。逆に年齢別では差はうかがわれなかった。